

鳥取県八頭郡郡家町

HANABARA

花原窯跡群発掘調査報告書

(県道大坪, 隼停車場線建設に伴う)

1992.3

郡家町教育委員会

序 文

この発掘調査報告書は、県道大坪・隼停車場線の建設に伴って実施した本町花原地内に所在する花原窯跡群の調査記録です。

郡家町内には原始・古代の遺跡が数多く存在しておりますが、近年、各種開発関連事業の増加とともに発掘調査は漸増の状況にあります。埋蔵文化財は貴重な歴史資料として、いろいろな情報を提供するばかりでなく、各種、生活の知恵をも現代人に与えてくれるものがあります。今日、開発と文化財の共存は地域文化の発展にとって、年をおって重要な課題ともなっています。郡家町教育委員会では、このような認識にもとづき、関係各機関との協議を重ね、また地元町民のご理解をいただきながら、地域の発展と文化財の共存を図るよう、文化財保護行政を進めているところであります。

今回の発掘調査も関係各位のご協力によって、無事所期の目的をはたしました。厚く御礼を申しあげる次第でございます。

平成4年3月

郡家町教育委員会

教育長 北村一利

調査関係者一覧

調査団長 北村一利（郡家町教育委員会教育長）
調査員 山形顯應
調査補助 道谷富士夫
調査指導 県埋蔵文化財センター
事務担当 教育委員会次長 広谷 龍亮
社会教育主事 市村 茂
作業協力者 田渕美道 清水好夫 清水なみ子 井上重雄 田中政明
福島 嶽 上嵩紀文 竹内俊夫 小谷喜持 新竹忠三
安部孝子 田中貞子 田中節子 大野美佐栄 和田政子
田中孝子 大野昌之 安部信道 福本 司 福本弘江
道谷美賀子 道谷千恵美 竹田芳野

例 言

1. この報告書は郡家町教育委員会が県道大坪・牛停車場線建設に伴って実施した発掘調査の記録である。
2. 調査は県埋蔵文化財センターの指導のもとに、平成3年4月19日から同年11月30日まで現地調査、同年12月1日から平成4年3月23日までを整理期間とした。
3. 現地実測及び現地での写真撮影は道谷富士夫が実施し、遺物撮影は山形顯應が、遺物実測及び清書は山形顯應、道谷美賀子、道谷千恵美が行ない、現地実測図清書を道谷富士夫が、執筆編集を山形顯應がそれぞれ分担して行った。
4. 本書に使用した方位は全て磁北を示し、上色等を示す色調は農林水産技術会議事務局監修「標準上色帳」によった。
5. 本書未掲載の遺物、写真、実測図等の保管は郡家町教育委員会が行う。

目 次

序	郡家町教育委員会教育長 北村 一利	1
調査関係者一覧		2
例 言		2
目 次		3
第一章 発堀調査に至る経過		4
第二章 遺跡周辺の歴史的地理的環境		5
第三章 調査の概要		8
第一節 調査地全域に亘る概要		8
第二節 土壌状遺構		12
第三節 10号窯脇土壤状遺構		13
第四節 3号窯、27号窯等の概要		14
第五節 3号窯概要		15
第六節 27号窯概要		17
第七節 10号窯概要		18
第八節 10号窯付近の灰原について		20
第四章 遺物について		23
3号窯出土土器（土器番号1～17）		23
27号窯出土土器（土器番号18～29）		24
10号窯出土土器（土器番号30～36）		25
10号窯脇灰原出土土器（土器番号37～77）		25
その他の土器（土器番号78～82）		28
土器観察表		29
第五章 土器及び遺構写真		31
土 器		31
遺 構		41
第六章 む す び		51

第一章 発堀調査に至る経過

花原窯跡群は、郡家町の北側を西流する私都川流域の丘陵地に散在する私都古窯跡群の中の小群である。郡家町の花原地区に所在する窯跡は、その数27基余が知られ私都古窯跡群の中では最大規模の窯跡群である。同窯跡群は、花原地内の西赤谷、森口谷、汁谷、猪ノ谷、穴住谷、本谷、相谷、志山路谷において灰原や須恵器の散布によって、その存在が知られていた。

このような窯跡の密集した花原地区内を経由し、西御門に通じる県道大坪・隼停車場線の計画が明らかになったため、郡家町教育委員会は鳥取県埋蔵文化財センターと話し合い、共に工事予定地に当る森口谷、汁谷の分布調査を実施した。

この分布調査で、これまでに確認されていた窯跡とその周辺に須恵器の散布していることが判明した。この調査にもとづいて、郡家町教育委員会は、工事予定地内全域にわたって、試掘調査を行なうこととした。

試掘調査は平成元年4月21日から現地での調査準備をし、郡家町教育委員会が調査主体となって実施された。

調査は県道予定地が林道に沿って計画されているため、林道崖面の精査を行ない、斜面にトレンチを入れたのである。それ等の結果、3基の窯跡と2ヶ所の灰原、土坑状遺構1ヶ所を確認するに至った。7月19日報告書作成作業を終了し、試掘調査の作業は完了した。以上の経過をたどって、今回の調査となった。

平成2年9月、工事関係者と話し合い、その結果平成3年度内に終了しなければならなくなってしまった。その同じ9月平成3年4月に本調査に入れるよう手配をする。

平成3年4月現場での作業に入り、同年11月末現場での作業を完了し、12月1日より整理作業及び報告書作業にとりかかる。

平成4年3月上旬すべての作業を完了した。

この紙面を借りて、この調査に際し協力して下さった方々に厚く御礼申し上げます。

第二章 遺跡周辺の歴史的地理的環境

花原窯跡群の存在する郡家町は鳥取県の東部に位置して、鳥取市の南側に隣接する農山村地帯である。現在、町役場の置かれている郡家には、国や県の各種官庁の出先機関が軒を連ねて、地方政治の中心的景観を呈している。

昭和57年同町万代寺地区発掘調査によって、奈良から平安初頭にかける因幡国八上郡の郡衙跡と考えられる遺構が、郡家を含む国中平野の一隅より検出されて、国中平野が古来より地方政治の中心地となるべき地理的要素をもっていたことが伺い知られる。

因幡国最大の郡であった八上郡の土師の郷に比定されている旧国中・賀茂村は国中平野を共有し、その国中平野を流れる私都川を古くは土師川と呼び、現在は賀茂神社に合祀された土師神社が稻荷の私都川沿いに存在し、その土師神社の安置されていた地点より私都古窯群の一つ花原窯跡群まで東南へ約2km、ついで夢は太古を駆け巡る。

郡家駅より郡衙跡と考えられる万代寺遺跡まで西南に約1km、郡衙跡より花原窯跡群まで北東に約4km、同じく郡衙跡より土師神社跡へは北々東へ約3km。土師神社跡より私都古窯群を見渡しても、山路へ約1km、山田へも約1km、下坂へは0.5km、奥谷へも0.6kmと近い。これ等私都古窯群は扇山を源流とする私都川の東岸の谷平野山裾に立地する。しかもこれ等の地域は何処を堀っても粘土層に当ると聞く。

花原窯跡群の周辺を歴史的に眺めてみると、西御門遺跡より縄文後期の土器、石匕、石斧、石鎌、石錘が出土しており、記憶の新しい所では、万代寺遺跡より縄文早期の「落し穴」や後期中葉の土器片、晚期の土器片の出土がみられ、郡家町内ではないが、鳥取市船木や古郡家から晩期縄文土器、河原町佐貫や鳥取市橋本から打製石斧が出土しているものの、縄文期遺物・遺構の検出密度はきわめて粗である。

弥生土器時代に入ると、下坂から袈裟擗文の銅鐸、船岡町破岩から現存しないが銅鐸の出土が「因幡志」に記されており、河原町今在家で中期の土器が。山田や鳥取市久末で弥生後期の土器が。船岡町牧野遺跡から中期から後期へかけての土器が。船岡町西ノ岡遺跡からは後期から終末期へかけての堅穴式住居跡、船岡町丸山遺跡でも堅穴式住居跡や中期土器、後期土器、分銅形土器片、石斧、石庖丁等。近くは万代寺遺跡から弥生中期の木棺墓21基、中期中葉の土器類、石器類、この時代のものと思われる堅穴式住居跡2基等の検出で縄文土器時代より検出密度を増している。

花原窯跡群調査中10号窯炊き口近くで須恵器に混じって、弥生式土器片を一片検出し、この近辺に弥生期遺構の検出が見られるかも知れぬと、楽しみに、検出場所へそのまま置いておいて残念ながら紛失、証拠を残すことができなかつたので此の報告書をかりて一応報告しておく。最近郡家町で下坂1号墓が発掘され、検出された土器類より類推して、弥

生後期後半と見られる木棺直葬墓七基が出土した。この下坂1号墓の発掘で、約1km位しか離れていない花原字森口の発掘現場に弥生人の痕跡を見ても不思議はない。

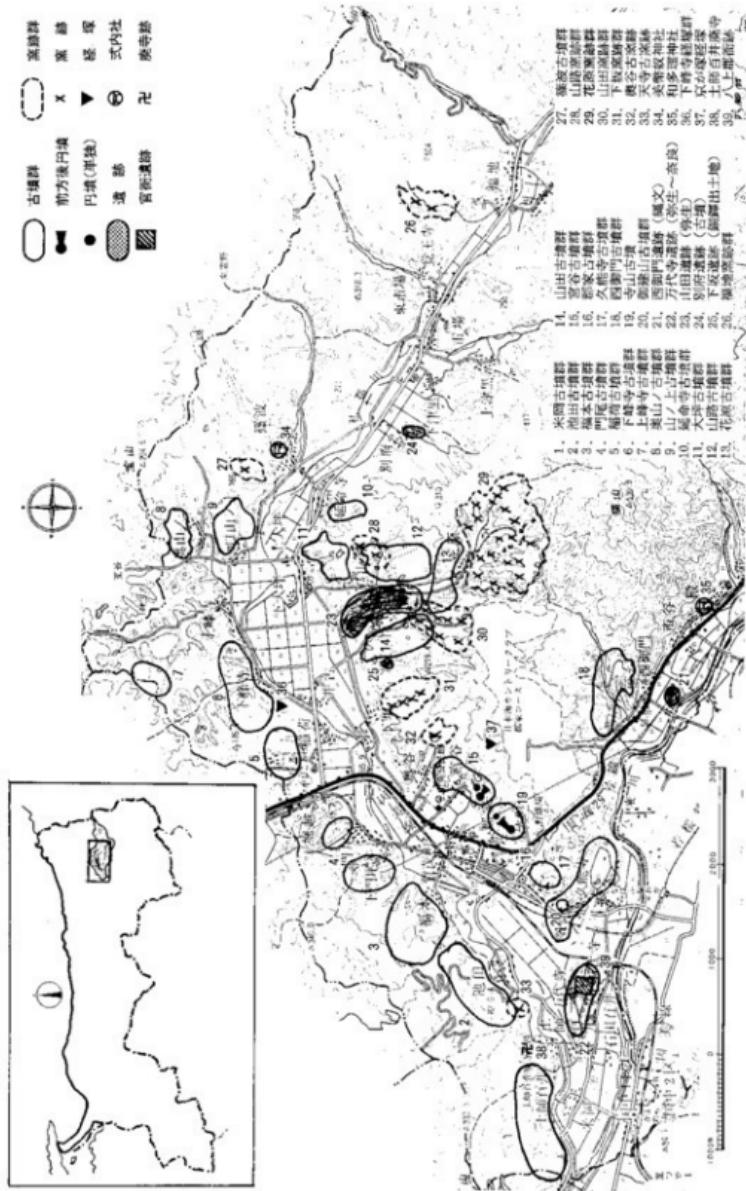
古墳時代に入ると花原窯跡群の周辺は遺跡・遺構の数を急増してくる。しかもそれ等遺構はほとんど古墳である。八頭郡内確認古墳の約85%が河原町と郡家町に集中し、私都川流域を見ても、下流域では立錐の余地もない位、丘陵斜面には古墳が並んでいる。しかしそれ等古墳は後期古墳がほとんどで、古式古墳としては久能寺の御建山古墳、河原町山手1号墳、同7号墳、船岡町丸山遺跡の多量の埴輪を伴う67m級古墳等があげられる。郡家町の御建山古墳は円筒埴輪や形象埴輪が検出されており、多数の埴輪に囲繞されたものと考えられている。万代寺遺跡からも円筒埴輪片が七点ばかり検出されており、官衙の出現前には埴輪を立て並べた古墳の存在を認めていいものと思われる。現在の郡家町東小学校の位置は旧山で、その陵線に11基の古墳があった。稲荷山古墳群と呼び、ほとんどは10m級の竪穴式石棺墓の円墳であったが、中腹の三基ばかりは古い土器を伴なっており、5世紀末から6世紀初頭のものと思われた。次いで後期古墳に入ってすぐのものと考えられる寺山古墳・宮谷1号墳が続くのであろう。靈石山山系の米岡、池田、土師百井、福本地内には横穴式石室を有する群集墳が多く、中には線刻壁画の描かれた古墳も見受けられる。

花原窯跡群の近辺は須恵器の窯跡が多く、鳥取市越路や郡家町の福地は6世紀代のものと知られ、奈良時代以降のものとして河原町牛ノ戸、同天神原、郡家町山田、山路、下坂等の私都古窯群が知られている。奥谷、下坂からは瓦窯跡も発見され、白鳳時代の法起寺式伽藍配置をもつ土師百井廃寺で使用されていた瓦と鷗尾片が検出されている。ただし土師百井廃寺で使用していた瓦には新旧の二種類があり、奥谷瓦窯で作った瓦が新旧いづれに属するのか筆者は見ていないので判らない。

昭和57年万代寺遺跡が発掘され官衙跡と見なされるもの三ヶ所、即ち北官衙、中央官衙、南官衙であるが、南官衙は溝状遺構だけで建物跡がはっきりしなかった。中央官衙より北官衙が古く、その北官衙付近より出土の布目瓦や軒丸瓦は土師百井廃寺跡より出土の古式の瓦と全て同じものであった。そのことより北官衙と土師百井廃寺の成立と建築主は同一の人物であろうと想像された。

最近郡家町は私都古窯群に属する地域の開発が盛んになり、昭和61年に山田窯跡群が発掘され、昭和62年には下坂窯跡群が発掘されている。また今回の花原窯跡群の発掘等によって、国府町の因幡国国衙や郡家町の郡衙に製品の供給がなされたこと等の事実が知られたり、又、これ等古窯の調査が進むにつれて今まで空白であった奈良、平安期以降の須恵器年代推定の尺度である土器形態の変遷が知られるようになるであろう。

第1図 郡家町遺跡分布図



第三章 調査の概要

第一節 調査地全域に亘る概要

花原窯跡群とは郡家町に存在する私都古窯群の一つ花原にある窯跡群を指し、花原地区内の西赤谷、森口、汁谷、猪ノ谷、穴住谷、本谷、相谷、志山谷等の標高150～300mの間に灰原の存在と、土器の散布状態により「鳥取県生産遺跡分布調査報告書」の中に取りあげられ、記載されているものを指す。今回の調査は前回汁谷から森口にかけて試掘調査が実施された、その試掘調査に基づいての森口に存在する窯跡の調査である。

この報告書の花原窯跡群とは花原地区の南方へ細長く延びる谷あい、字森口の丘陵裾部に存在する三基の窯跡を指す。前回の試掘調査に際して使用した地区割及び「鳥取県生産遺跡分布調査報告書」より推測して付けたと思われる窯の号名は、今回の調査にそのまま踏襲して使用することとした。

試掘調査報告書を検討し、第31区に掘られた第7トレンチ、第33・34区に掘られた第2トレンチ、第35区に掘られた第3トレンチ、第42区に掘られた第17トレンチの四ヶ所を中心調査することとした。第7トレンチ周辺は本書土壤状遺構として、第2トレンチ周辺は本書第10号窯及び第10号窯脇灰原として、第3トレンチは第10号窯脇土壤状遺構として、第17トレンチは本書第3号窯及び第27号窯跡として取り上げた。

この窯跡のある谷合いは、第3号窯の南約30m位の位置まで、花原の集落より南へ延びる延々600mに及ぶ「田」である。幅員広い所で約40m、狭い所で約10m、高低差は約50m、海拔約140m～約190mにおよんでいる。迫り来る丘陵の傾斜や谷の状態から考えて深い所では高度にして10m位谷を埋めて「田」を造成したものと思われた。数ヶ所耕上の下を調べてみると青灰色の粘土層で、土器や炭片を含有していた。おそらく谷を埋めて水田を造成する際、耕土下の水漏れ防止の床として粘土を使用したのであろう。

田を造成する前の旧地形を想像してみると、谷底近くに焚口を有する窯ならば完全に田の下に埋没したであろうし、少々上部に焚口を有した窯でも、煙道部や煙道に近い部分は造成時削り取られたであろうと思われる。道路は南に延びる田の西側を走っているが、第10号窯の南約60mの路肩に痕跡だけではあったが二基の窯跡を検出した。第3号窯や第27号窯の存在する位置は、田の造成に2～3m位しか埋めていないと思われる地点だし、10号窯の存在する位置は、谷底より約10m近く登った所であるが、西へ向う扇状地を利用して張り出し台地を作り、作業し易い台地を中心に数基の窯を築いたので他の窯に比較して高所へ窯が築かれたこの谷に於いては特殊な例かも知れない。



第2図 郡家町全図

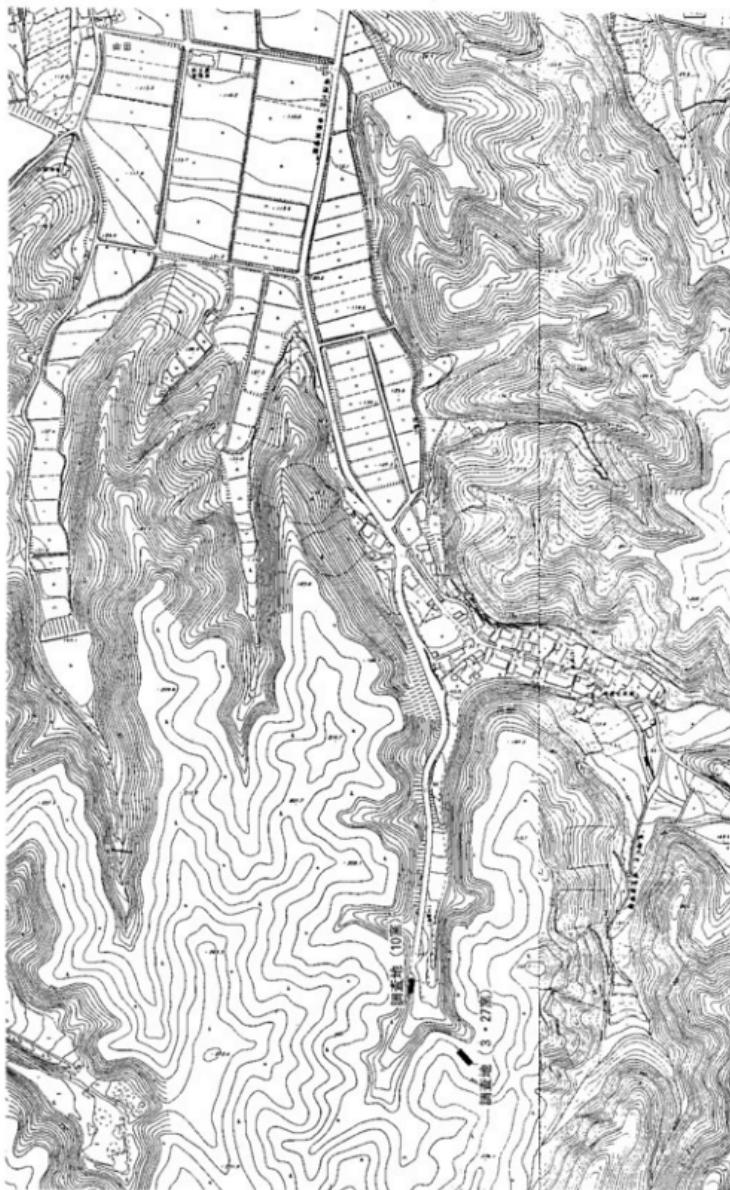


第3図 花原地域図



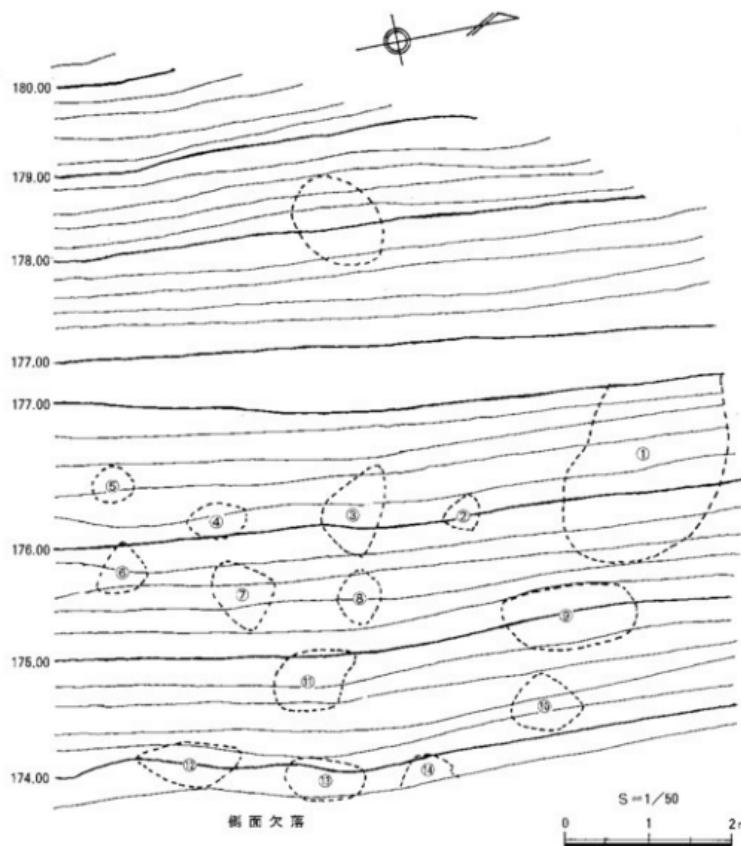
第4図 調査地全図

第5図・調査区域配図

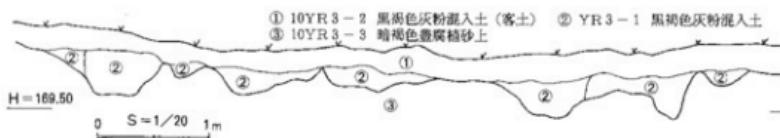


第二節 土 壤 状 遺 構

この調査地は、試掘調査第7トレンチ近辺で、試掘調査報告書に「急傾地ではあるが2m×3m、深さ約20cmの浅い土坑状を呈する堀り込みがみられ、炭・土師器片を検出する」とあったことより調査することにした。第6図区域内の表土下10~45cmの豊腐植土層上面が遺構面で、図の上方約3%は遺構層が20~30cmと薄く、遺構は砾岩面を穿っていた。



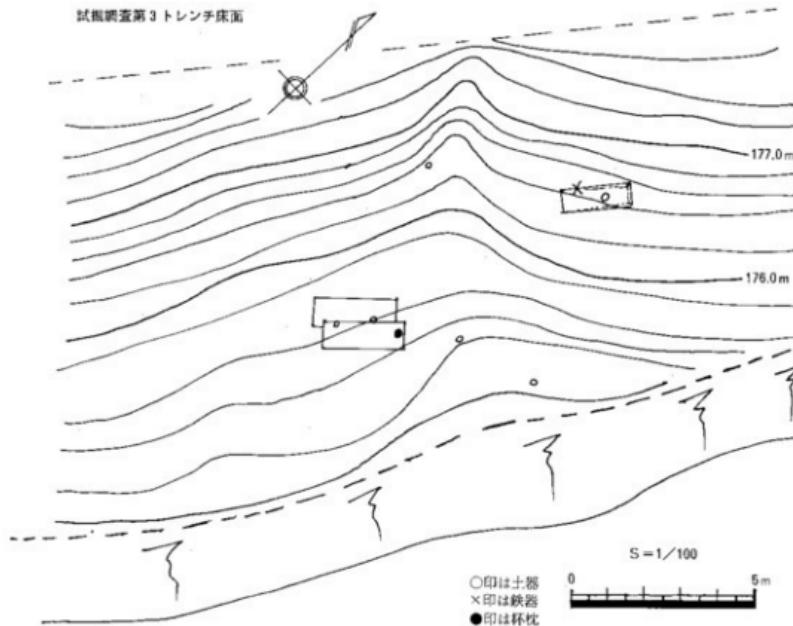
第6図 土 壤 状 遺 構



第7図 土壌状遺構壁面図

第6図下端左に接するのが第7図であるが、炭粉の混じった落ち込みと表土中採集の土師器2点、性格のつかめない遺構であった。

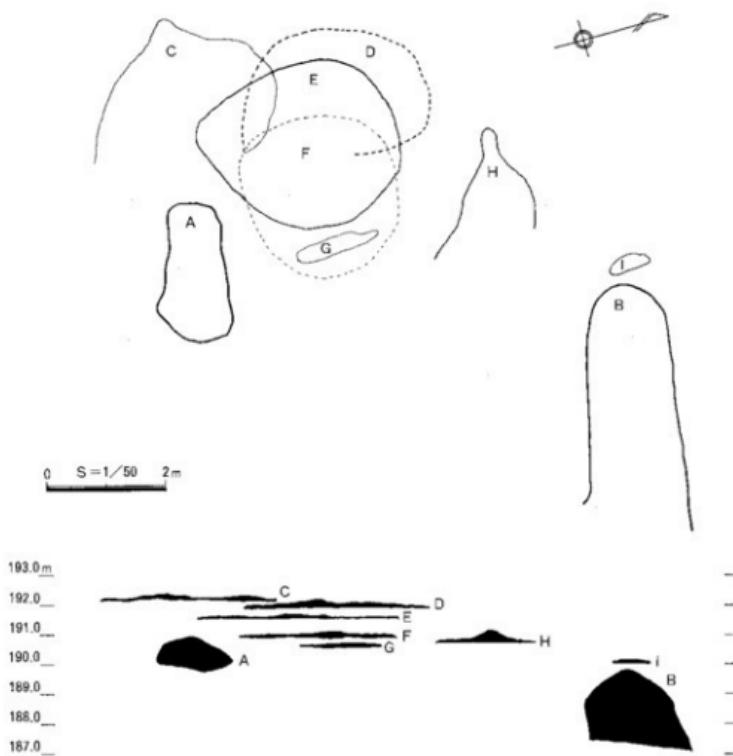
第三節 10号窯脇土壤状遺構



第8図 10号窯脇土壤状遺構

須恵器片混入土壤中斜面に対し垂直に突き刺した鐵器を検出、鐵劍に酷似していたため、古墳を意識して堀った。この区域は土壤が削り取られ、後に10号窯脇灰原出土土器と同時代の土器混入土壤が流入したものと思われる。但し、土器番号81が枕状になっていた土壤状遺構は七世紀前半の埋葬施設と考えてもよいと思う。

第四節 3号窯、27号窯等の概要



第9図 3号窯・炭窯・中間二基の窯・27号窯配置図

3号窯、27号窯は花原の集落より南方約600mばかりの細長い谷筋に入った所にあり、造成された「田」の最上段にはほど近く西側の山裾に位置している。この附近の水田は幅約10m、杉の切り株より約30年前、この辺一帯の水田は杉の林になったようだ、地形から谷底より2~3m位盛土をして階段状の水田を造成したものと思われた。

3号窯は窯体の中間あたりで切り取られ、谷底に埋められたらしい。焚口及至灰原の一部でも検出できないかと水田の青灰色粘土床の下を掘る。わずかに灰原の痕跡らしいものが見られたに過ぎなかった。27号窯は燃焼部の一部を残して切り取られ、灰原など痕跡すら残していない。両窯共谷底より1~2mの間に焚口を設けていたものと思われる。

この3号窯、27号窯のある地域の土壤は非常に微細で層が厚い。このような所は、10号窯附近、10号窯の南約60mの二基の窯跡の痕跡のあった附近と、本書土壤状遺構の下方で、土壤状遺構の所を除いては皆窯や窯の痕跡が確認されている。集落に近い土壤状遺構のある所や10号窯附近は農家の人にによって水田用苗床の土取場となっていた。藁を切って土にまぜ、水でこねればすぐ泥壁として使える。水の便も良かったせいか、3号窯や27号窯の上部や脇は炭窯の痕跡が重なるように造られていた。3号窯や27号窯をこわしたのは水田の造成工事によるばかりでなく炭窯の築造によるものが大きい。3号窯と27号窯との間に炭窯の築造で跡形なくこわされた二基の窯の痕跡で、熱で赤変した酸化土の形態より、3号窯に近い方は煙道部に近い部分と思われ、土師器に似た土器片、土器番号79と80を検出、27号窯に近い方は、煙道部とその下方1m位と思われた。

第五節 3号窯の概要

3号窯は観察の結果半地下無階段の登り窯と判断された。窯の築造にあたっては、丘陵傾斜面を利用し、半地下の穴を掘り削って、その内面に10~15cmの厚さに粘土を張り付け、地上窯体壁には、5cm前後に裁断された藁の混入された粘土が使用されたらしい。

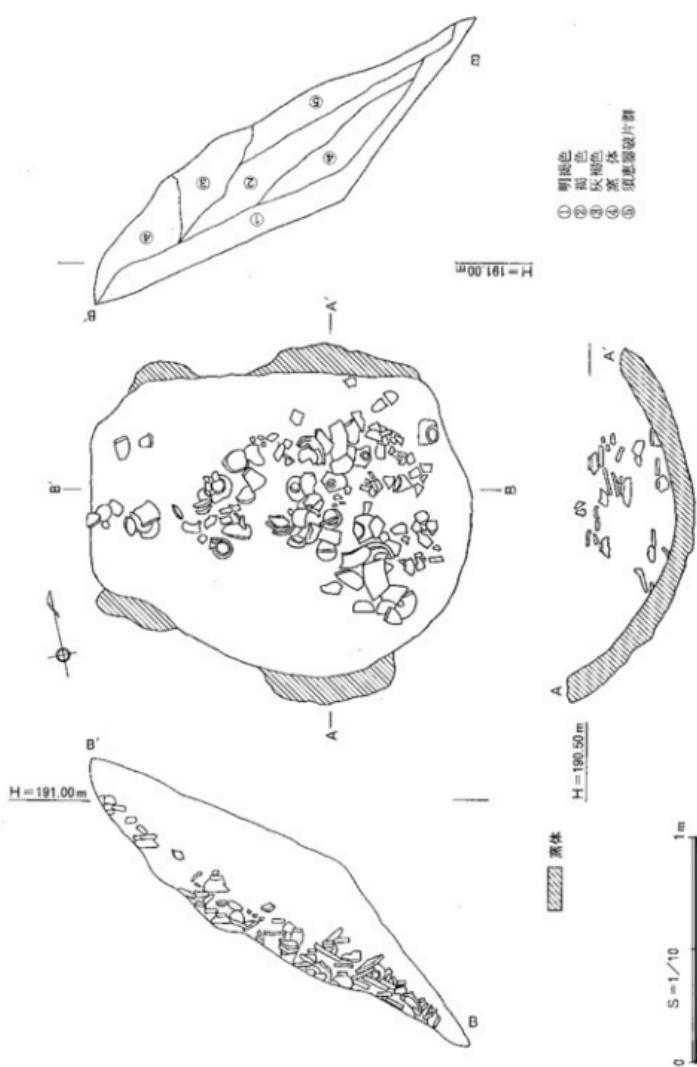
煙道の一部も検出され、それによると内径20cm前後の粘土製筒状であった。

3号窯と27号窯との間に二基の窯跡らしいものが検出されており、27号窯に近い方は、実測こそできないが、煙道部分がそれとなく想像できた。鶏卵尖端状に狭まり、その先端は床面より約30cmの所で階段状に水平に約40cm延びて、垂直に上方へ抜けていた。3号窯の場合も残っている煙道部分の位置からみると、ほぼ27号窯脇のものに似ている。但し、窯の床面に平行に延びていたと思えた。

窯の床面の観察から、窯の修理の時、落下する修理の土塊が見当らず、床面の修理された痕跡もなかった。この窯は1回から数回無修理のままで使用されたものと思われる。

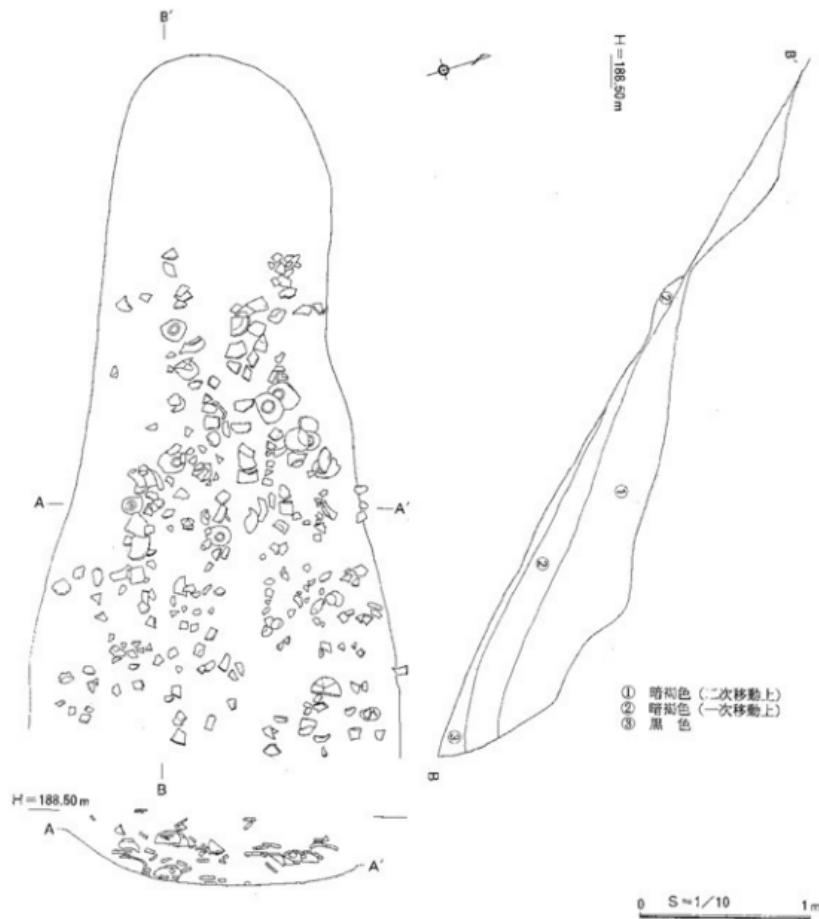
窯内土器の出土状況より、この窯の中へ他の窯製土器の混入は考えられない。

第10圖 3號礮遺構圖



第六節 27号窯概要

この窯は水平な燃焼部約50cmを残して、それ以下は切り取られ、燃焼部に続く焼成部も2.5m、それから約1m離れて約50cmほど床面を残している窯跡である。窯内検出の土器は、燃焼部に近い焼成部床面近くから採取した土器以外は、他の窯製土器の混入が充分考



第11図 27号窯 遺構図

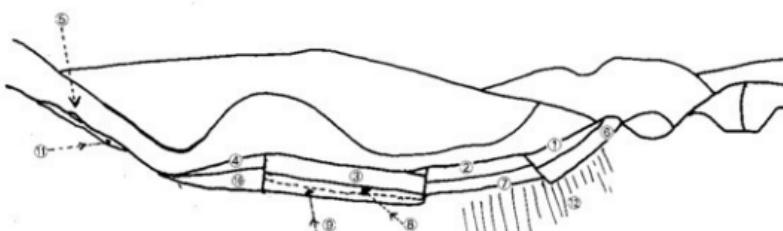
えられ、窯の熱残留磁気測定をされたが、土器実測に際して、この窯製土器と思われる位置出土のものを選んだつもりでもあまり自信がない。

この窯も3号窯と同様半地下無階段登り窯である。しかしこの窯の製法が変っている。燃焼部の床は堀り込まれた地山そのままのようだが、焼成部は谷川の砂利や非常に荒い砂が敷き詰められ叩きしめられた痕跡がある。おそらく堀り込まれた窯の内壁は砂利などをつめ棒や板などで叩きしめたものと考えられる。地上窯体部分は、附近の土に藁を混ぜ、壁土状にしたもので築いたのか、粘土窯体片の検出はされなかった。

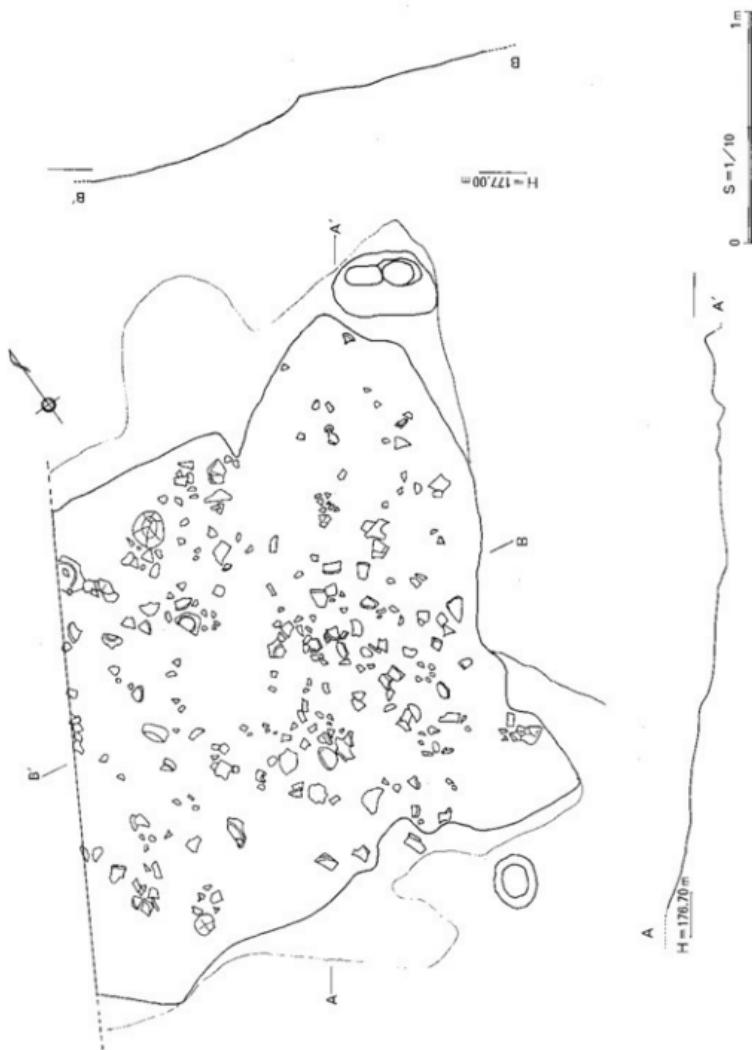
第七節 10号窯概要

この窯は燃焼部、焼成部の中間約1mが試掘調査時のトレンチとして堀られ、残す所焼成部約1m、燃焼部約1~1.5mで、極く限られた狭い範囲の調査であった。しかしトレンチ壁面を精査して、主軸の方向が少し異なる4基の窯が観察され、実際に堀り進めて行くうちに、4基と思われていた窯が一体化して燃焼部、焼成部共幅2.5mを越す巨大窯となってしまった。当初左右いづれが先か判断できなかったが焚口が第13図の中に入る程度のものが作られた。3番目は左右二基の中間に作られ、4番目に3番目の右寄りに位置を少しずらして作られたものと思われる。3番目、4番目は燃焼部が第13図下端の涯面に観察された。当初作られた左側の窯には屋根がかけられたらしく、柱の穴が4番目の燃焼部相当位置に見られる。第14図左端下部が第12図で、4基以上の窯体の底部が一体化しており、どのように作られ、どのようにこわされたか判断できない。

① 10YR3/4	暗褐色窯体	⑥ 10YR3/3	暗褐色燒土
② 5YR4/2	灰褐色窯体細砂	⑦ 5YR3/4	暗赤褐色燒土
③ 5YR4/2	灰褐色窯体細砂	⑧ 5YR3/1	黑褐色燒土
④ 2.5GY6/1	オリーブ灰色窯体粒砂	⑨ 5YR3/3	暗赤褐色燒土
⑤ 7.5Y5/2	灰オリーブ色窯体	⑩ 5YR3/4	暗赤褐色燒土
		⑪ 5YR3/6	暗赤褐色燒土
		⑫ 10YR4/6	褐色土



第12図 10号窯壁面切断図



第12図 10号系溝跡図

第八節 10号窯附近の灰原について

10号窯附近を調査する前に、試掘調査の折掘られた第2トレンチを精査しなければならなかった。トレンチは遺構の実在する西側丘陵調査し得る境界ぎりぎり、それも約1m前後を残して1m×28m前後掘り込まれており、このトレンチ壁面及び底部の精査で得たものが、今回の調査で知り得る調査量の大半を占めるだろうことが当初現地を見た時、感じたことで、実際そのような結果になってしまった。

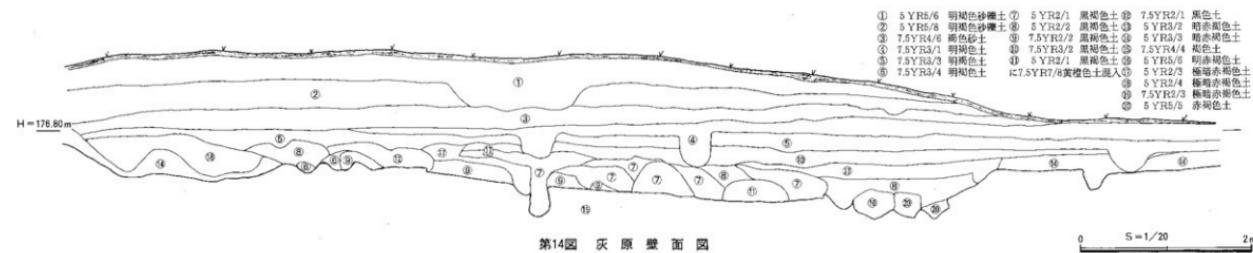
トレンチ西側壁面を観察して、10号窯は窯の底部湾曲中心軸を窯の中心軸と考えて、その中心軸が左右1.5mの間に4本あることが観察された。窯を壊して造り、又壊して造ったと思われる跡である。窯の右側の灰原は、トレンチの方へ流れ込んでいる灰原の筋と見られるもの7本が観察され、トレンチ西の斜面上部に数基の窯の存在を知った。

トレンチ東側壁面より、10号窯は底部落ち込み幅2.5mの水平な燃焼部と観察され、西側壁面で観察される4基の窯との関連はつかめなかった。灰原の観察では、トレンチ幅約1mであるのに、反対側壁面には灰原の帶が見当らず混然と一体化されていた。

この地域は遺構面上、所によっては遺構面を削り取り、前後二回に亘って却土され、農耕地として利用されていた。もともと西へ向う扇状の丘陵壁を利用し、盛土をして平坦な台地を張り出している地域なので畑として利用するには限られた区域内では最良の場所である。灰原の調査はトレンチの西側を遺構面まで一気に削り取り、平面的に灰原の筋をつかむことができなかつたので、土器出土状況より灰原の筋数、時代的前後関係、調査地西側に存在するであろう窯数を推定できるよう、土器は作図の上取り上げるよう指示し、作業を進めたものの、調査協力者への意志の疎通と、あまりの煩雜さのため、不可能に近いものとなってしまった。もっとも流れをつかもうにも1m弱では致し方ない。

トレンチ東側では、灰原の筋をつかむ事は当初より不可能と思われたので、作業小屋等窯に関連のある遺構の検出を目的に調査した。その結果、作業小屋等建物の柱穴跡は一つも見当らず、意味不明の土坑状遺構の検出に止まつた。いづれの土坑も形態は不規いで、深さは全般的に深く堀られていた。中には1.2mに及ぶものもあり、ほとんどの土壤には土器を含む炭灰を入れ、その上に土をかぶせ、又土器を含む炭灰を入れて土で覆うという作業がなされている。その土をかぶせる作業は、自然に周辺の土がくずれ落ちたのかも知れない。大ていの土坑の状態では穴の周辺に土が多く、中心部は覆われていないものもあった。いづれにしろ意味不明の土坑であった。

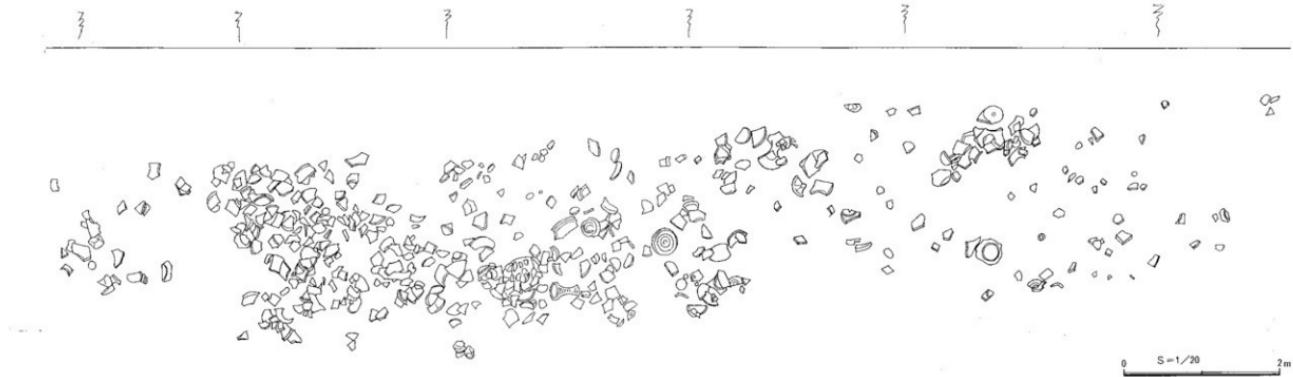
灰原は筋として作図出来なかつたが、観察の結果7條を数えることができ、少なくとも3基の窯から出した灰原であると思われた。今回の調査地域外直近に3基の窯が存在しているものと思われる。



第14図 灰原壁面図

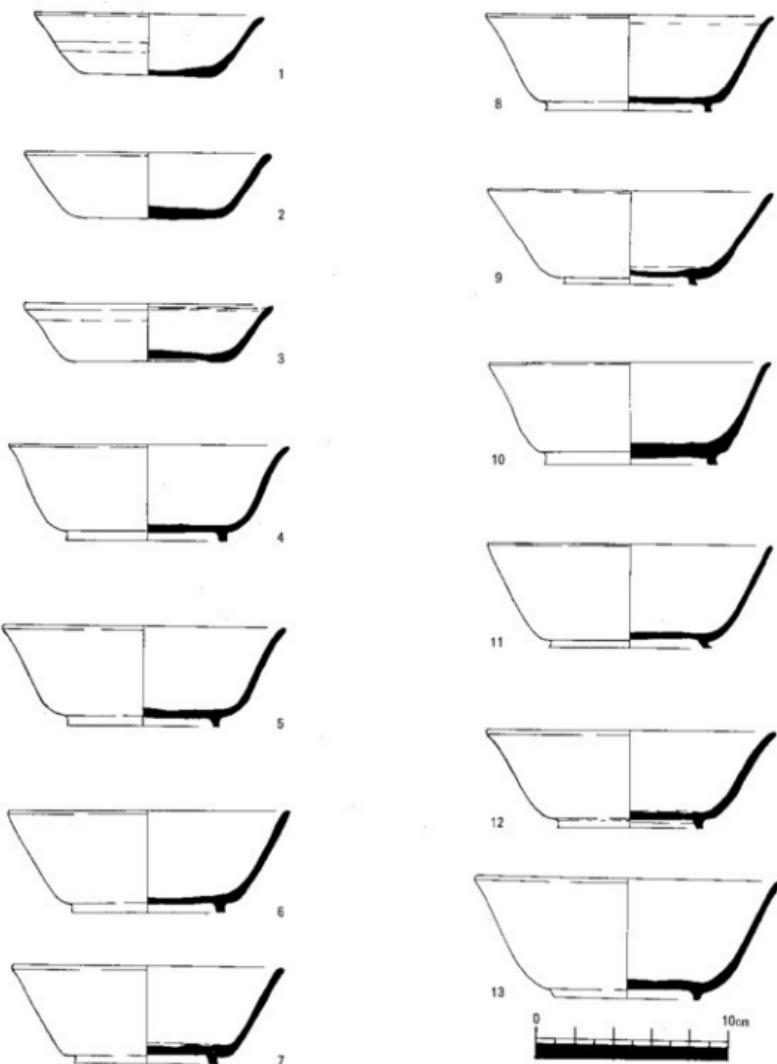


第15図 10号窯発掘前の試験調査第2トレンチ西側壁面図



第16図 灰原遺構図

第四章 遺物について

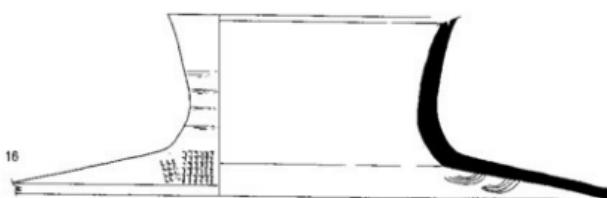




14



15



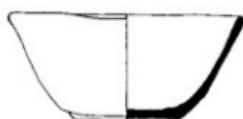
16



17



21



18



22



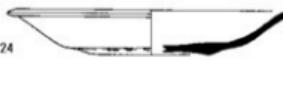
19



23

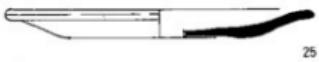


20

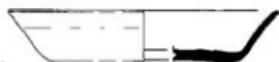


24

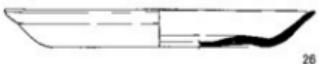




25



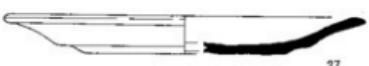
33



26



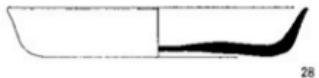
34



27



35



28



36



29



38



30



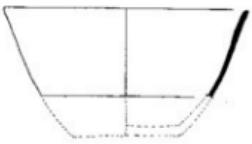
39



31



40

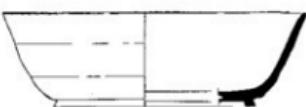


32

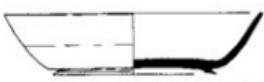




41



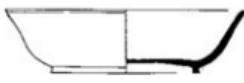
48



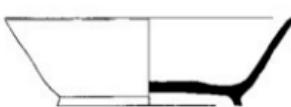
42



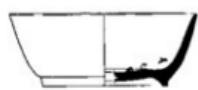
49



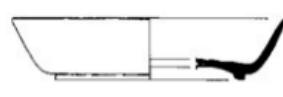
43



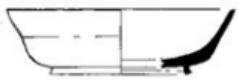
50



44



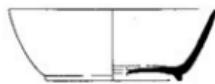
51



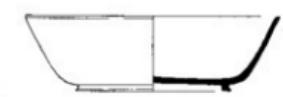
45



52



46



53



47



54





55



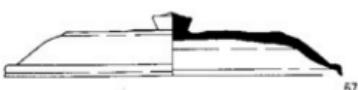
64



56



65



67



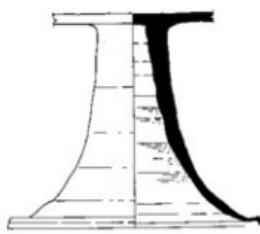
66



68



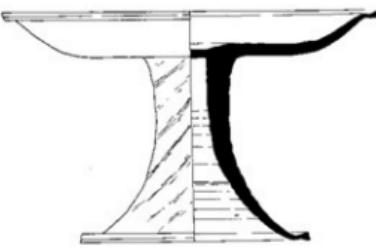
59



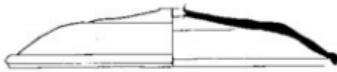
67



60



68



61

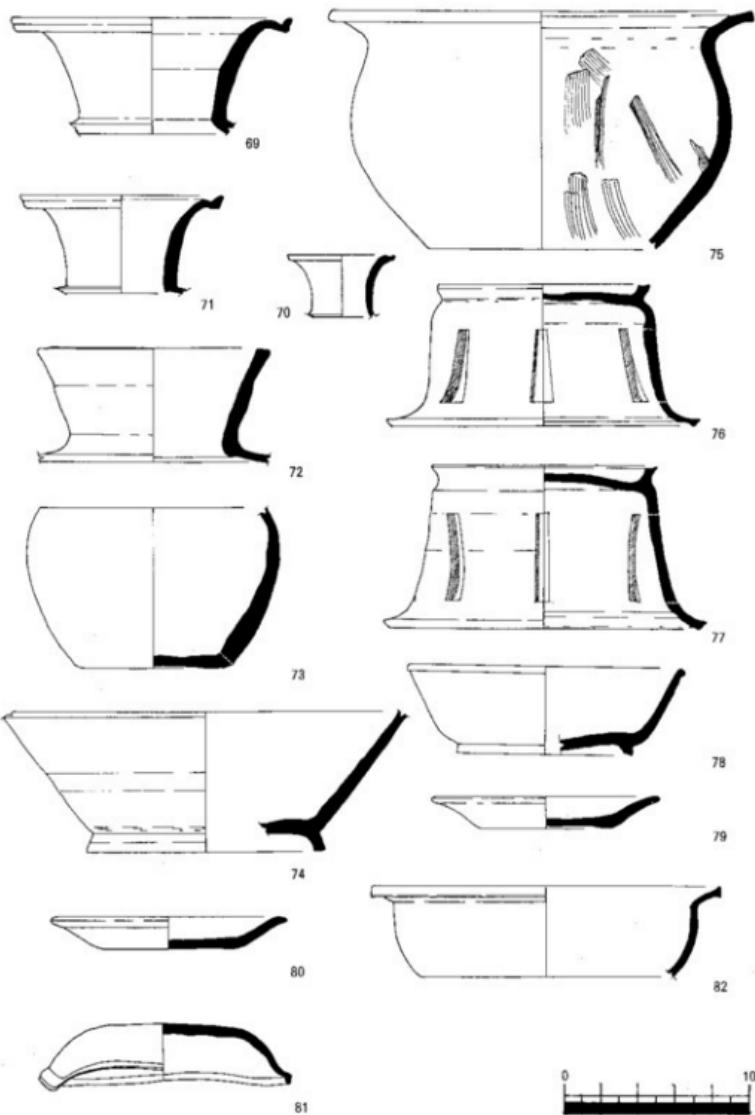


62



63





土器 番号	器 種	法 量(cm) 口径 器高	形 態 手 法等 の特 徴	施 土	填 成	ロ クロ 開 放 方 向	色 調
							形態の特徴
1	杯	12.0 3.2	圓錐形切り。成形は粗雑。	1mm程度の粗砂1.5%位混入した 緻密な粘土。	繊く軟	左	7.5YR 1/1灰白色
2	杯	12.0 3.5	圓錐形切り後底面削り。成形は粗雑。	粗雑な粘土。	軟	左	7.5YR 1/1灰白色
3	杯	13.0 3.1	圓錐形切り後底面削り。底面はやや良好。	1mm~0.5mmの粒砂15%位含まれ ているが、緻密な粘土。	軟	左	7.5YR 1/1灰白色 であるが、輪郭部下 部に青緑色の内 張物色をしている。
4	高台付杯	14.8 4.6	圓錐形切り後底面を付ける。 成形は良好。	3mm程度1%、1mm程度5%の粒 砂が混入した緻密な粘土。	堅	左	10YR 5/1地灰色。
5	高台付杯	19.0 8.2	圓錐形切り後底面を付ける。 成形は良好など、焼成後表面破損したもの と思われる。	3mm~2mmの粒砂5%位混入され た緻密な粘土。	良好	左	7.5YR 2/1灰オリ ーブ色
6	両台付杯	14.8 4.4	圓錐形切り後底面を付ける。 成形は良好。	2mm~1mmの粒砂5%位混入され た緻密な粘土。	良好	左	2.5YR 2/1灰黄色
7	両台付杯	14.2 5.5	圓錐形切り後底面を付ける。 底面にゆきかが見られる崩落より破損して遺 さされたものと思われる。	2mm~1mmの粒砂5%位混入され た緻密な粘土。	良好	左	7.5YR 6/1地灰黑色
8	両台付杯	15.0 5.0	圓錐形切り後底面を付ける。 底面にゆきかが見られる崩落が大であったと 思われる。	2mm~1mmの粒砂5%位混入され た緻密な粘土。	良好	左	7.5YR 1/1灰白色
9	両台付杯	15.0 4.9	圓錐形切り後底面を付ける。 成形は良好、焼成感、胎土の縮小辺の關係 で焼成したらしくひびきが入っている事が観 察される。	1.5mm位の粒砂5%位混入した 緻密な粘土。	良好	左	8 YT 1/1灰白色
10	両台付杯	14.8 5.5	圓錐形切り後底面を付ける。 成形は良好。	3mm程度の粒砂2%位混入され た緻密な粘土。	軟	左	8 YT R 8/2灰白色
11	両台付杯	15.0 5.4	圓錐形切り後底面を付ける。 成形は良好。	2mm位の粒砂1%位混入した緻密 な粘土。	軟	左	10 YR 8/2灰白色
12	両台付杯	15.2 5.8	圓錐形切り後底面を付ける。 成形は良好。	4mm~1mmの粒砂2%位混入され た緻密な粘土。	良好	左	8 YT 6/1地灰白色
13	両台付杯	16.0 6.5	圓錐形切り後底面を付ける。 成形は良好。	緻密な粘土。	中や軟	左	5 PT 7/1明灰灰色~ 10 YR 6/4灰黄橙色
14	杯蓋	16.8 2.6	圓錐形切り後つまみを付ける。 成形は粗雑的に上手な手が少々見。	1mm~0.5mmの粒砂15%位含むす る少し粗な粘土。	中や軟	右	2.5YR 6/3灰黄色
15	杯蓋	15.8 2.6	圓錐形切り後底面を付ける。 つまみを付ける。成形は良好。	1mm程度の粒砂5%位混入され て、他は非常に緻密で緻密な粘土。	中や軟	左	7.5YR 6/2灰黄色
16	瓶	(普請式)	圓錐形切りと底の腰いで胴と首部をつき足して ある。内部多量内灰。	非常に粗砂で緻密な粘土。		不明	2.5YR 6/4灰黄色
17	杯	11.6 4.2	圓錐形切り。成形はやや良。	1mm程度の粒砂2%位混入した 緻密な粘土。	軟	左	2.5YT 1/1灰白色
18	杯	12.6 5.6	圓錐形切り。成形は粗雑。 焼成時母材は少しがれれたものと思われる。	1mm程度の粒砂10%位混入され て、他は非常に緻密で緻密な粘土。	良好	左	8 PT 6/1明灰灰色~ 10 YR 6/4灰黄橙色
19	杯	14.2 6.3	圓錐形切り後底面を付ける。 成形は良好。	1mm~2mmの粒砂3%位混入。 3mm程度の粒砂多く混入され て、少々粗な粘土。	良好	左	N6/0灰黑色
20	杯	15.4 6.5	圓錐形切り。成形は良好。	1mm~1mm程度の粒砂20%位混入 されたやや粗な粘土。	軟	左	7.5YR 8/1灰白色を 白っぽくした色
21	杯	14.0 4.0	圓錐形切り。成形としては整っている ものの素朴な感じ。	0.5mm~1mmの粒砂3%位混入さ れた粗な粘土。	軟	左	10 YR 6/2灰黄褐色
22	両台付杯	11.2 5.7	成形は良好。	1.5mm位の粒砂10%位混入され たやや粗な粘土。	軟	左	7.5YR 8/1灰白色を 白っぽくした色
23	両台付杯	10.4 3.7	成形はまだが技術的に上手な方。	0.5mm~1mmの粒砂15~20%位含 まれた粗な粘土。	堅	左	N7/0灰白色
24	瓶	17.8 3.4	圓錐形切り。	細砂少々混入されど非常に緻密な 粘土。	中や軟	左	10 YR 6/1灰白色
25	瓶	16.6 1.6	圓錐形切り。成形はやや粗。	1mm程度の粒砂10%位混入され たやや粗な粘土。	軟	左	10 YR 7/1にぼい青 褐色
26	瓶	16.8 2.0	圓錐形切り。成形はやや粗。	1mm程度の粒砂15%位混入され たやや粗な粘土。	軟	左	10 YR 8/1灰白色
27	瓶	19.6 2.1	圓錐形切り。成形はやや粗。	1mm~2mm程度の粒砂10%位混入 されたやや粗な粘土。	軟	左	2.5YR 7/2灰褐色
28	瓶	16.7 2.7	圓錐形切り。	2mm位の粒砂1%位混入され て、他は緻密で緻密な粘土。	中や軟	左	7.5YR 1/1灰白色を 白っぽくした色
29	桝蓋	14.6 1.9	圓錐形切り後つまみを付ける。 成形は粗。	0.5mm~2mm程度の粒砂が多く混 入しざらっくが、胎土としては緻 密な方。	堅	左	8 YT 6/1灰白色
30	杯	10.6 3.1	圓錐形切り。成形は粗雑。	粗砂で緻密な粘土。	堅	左	8 YT 6/1灰白色
31	杯	12.4 9.0	圓錐形切り。成形はやや粗。	5mm程度の粒砂10%位、2mm程 度の粒砂2%位混入したやや粗な 粘土。	軟	左	7.5YR 6/1灰白色
32	杯	13.2 不明	成形は良好。	0.5mm~1mmの粒砂5%位混入し た緻密な粘土。	良好	左	7.5YT 1/1灰白色
33	両台付杯	14.6 3.3	圓錐形切りと思われるが輪郭はへきり せず、成形は良好。	1mm程度の粒砂1%位混入され たやや粗な粘土。	軟	左	8 YT 6/1灰白色

上器 番号	器種	注量 (cm)	形態 手法 等 の 特徴	給 土	施 成	ロタロ 回転方向	色 調	
34	杯型	12.3	1.4	圓輪各切り縫つまみを付ける。 成形は粗糲。	0.3mm程度の粒砂20%位混入され た、やや粗というより繊細に近い 粒土。	中や軟	左	10YY7/1灰白色
35	杯型	18.8	1.8	成形は粗。土壌にはじけが見らるる。	0.5mm程度の粒砂20%位混入され た、やや粗といひよりも繊細。 粗糾約20~25%位含まれていても粒土 としては適切な方。	良好	左	N8/0灰白色
36	杯型	18.4	1.8	圓輪各切り縫つまみを付ける。 成形した後技術的にはあまり上手ではない が丁寧な方。	0.5mm~1cmの粒砂2%位混入さ れたやや粗な粒土。	良好	左	N8/0灰白色
37	杯	14.8	3.5	底部回転式切り。成形はやや粗。	0mm~1.1mm程度の粒砂2%位混入さ れた粒砂や粗な粒土。	軟	左	2.5YY6/1灰黄色
38	杯	12.6	3.4	底部回転式切り。成形はやや粗。	0.5mm~1.1mm程度の粒砂2%位混入さ れた粒砂や粗な粒土。	軟	左	2.5YY6/1灰黄色
39	杯	14.6	3.9	底部回転式切り。成形は良好。	1.3mm~1.8mmの粒砂15%位混入さ れたやや粗な粒土。	软	左	2.5YY8/3灰黄色
40	高台付杯	12.0	3.6	底部回転式切り後底面を付ける。 成形はやや粗。	0.5mm程度の粒砂1%位混入した粒土。	软	左	2.5YY8/3灰白色
41	高台付杯	12.8	3.6	底部回転式切り後底面を付ける。 成形は良好。	1mm程度の粒砂5%位混入された粗 糲な粒土。	中や軟	左	2.5YY7/1灰白色
42	高台付杯	14.0	3.4	底部回転式切り後底面を付ける。 成形は良好。	細砂で粗糲な粒土。	良好	右	7.5YY8/2灰オーラ 色
43	高台付杯	13.0	3.5	底部回転式切り後底面を付ける。 成形は良好。	0.5mm程度の粒砂20%位混入し たやや粗な粒土。	软	右	7.5YY6/2灰白色
44	高台付杯	10.0	3.9	底部回転式切り後底面を付ける。 成形は良好。	2mm~1.5mm程度の粒砂3%程度 含められ粗糲な粒土。	良好	左	2.5YY8/1灰白色
45	高台付杯	12.4	2.8	底部回転式切り後底面を付ける。 成形はやや粗。	1mm位の粒砂1%位混入した粗糲 な粒土。	中や粗	左	2.5YY7/1灰白色
46	高台付杯	11.2	3.9	底部回転式切り後底面を付ける。 この高台の底面に粗糲な粒土が付 いてる。成形はやや粗。	0.2mm程度の細砂20%位含んだ粒土。	良好	左	2.5YY8/1灰白色
47	高台付杯	12.8	5.0	底部回転式切り後底面を付ける。 底面にゆがみが見られる所から、ゆがんで 破損したため残されたものと思われる。 成形は粗。	2mm~1.5mm程度の粒砂混入され た粗糲な粒土。	右	5PBT/1明青灰色	
48	高台付杯	17.4	5.1	底部回転式切り後底面を付ける。 成形は良好。	0.5mm程度の粒砂15~20%位含ま れた粗糲な粒土。	良好	左	7.5YY7/2灰白色
49	高台付杯	14.6	4.5	底部回転式切り後底面を付ける。 底面にゆがみがある中で付けてある。 底面のゆがみから底面の中でも付損した ものと思われる。成形は粗。	3mm程度の粒砂20%位含んだ粒土 と細砂で粗糲な粒土。	右	7.5YY6/1灰白色	
50	高台付杯	15.8	4.8	底部回転式切り後底面を付ける。 成形は良好。	0.5mm程度の粒砂20%位混入され て、非常に粒細で繊密な粒土。	软	左	2.5YY8/2灰白色
51	高台付杯	14.8	4.8	底部回転式切り後底面を付ける。 成形は粗。	細砂で非常に粗糲な粒土。	良好	左	7.5YY6/2灰オーラ 色
52	高台付杯	17.2	5.1	粒土こねる時、空気泡も不良ではつけた跡 が見受けられる。成形後クロス糊化して調 整してある。成形は良好。	3mm~1mm位の粒砂3%位含まれ ているが繊密な粒土。	中や軟	左	7.5YY8/1灰白色
53	高台付杯	13.8	4.1	底部回転式切り後底面を付ける。 底面に粗糲な粒土が付いている。	1mm位の粒砂1%位混入した粗糲 な粒土。	中や軟	左	N8/0灰白色
54	盤	16.0	1.9	底部回転式切り。成形はやや粗。	細砂少々混入されると非常に粗糲な 粒土。	中や軟	左	10YY6/1灰白色
55	盤	13.4	1.9	底部回転式切りと遡れられるが、裏面で調整 をしているので不良。成形は良好。	1mm位の粒砂10%位混入されると粗 糲な粒土。	不規		7.5YY8/2灰白色 繊密10~15%位で灰白色 を呈している。
56	盤	16.0	3.0	底部回転式切り後回転機振りにて成形。 成形は良好。	細砂少々混入されると非常に粗糲な 粒土。	中や軟	左	10YY7/1灰白色
57	杯盤	18.2	3.4	底部回転式切り後つまみを付ける。技術的 に上手であるが成形には粗。	細砂少々混入されると極めて繊密な 粒土。	软	左	2.5YY7/2灰黄色
58	杯盤	13.8	2.8	底部回転式切り後つまみを付ける。 盤成形は非常に上手。	1mm程度の粒砂10%位合せられると 繊密な粒土。	中や軟	右	NT/0灰白色
59	杯盤	16.8	3.6	底部回転式切り後つまみを付ける。 成形はやや粗。	非常に細砂で繊密な粒土。	良好	左	10YY7/1灰白色
60	杯盤	17.2	2.6	ロムにて回転式切り後つまみを付ける。 成形はやや粗。	1mm程度の粒砂2%位混入された粒 土。	右		N6/0灰白色
61	杯盤	18.0	3.2	底部回転式切り後つまみを付ける。 成形は粗。	1mm程度の粒砂の混入が粗受けられ るが相手で粗糲な粒土。	良好	左	2.5YY8/1灰白色
62	杯盤	12.5	6.1	底部回転式切り後つまみを付ける。 成形は粗。	1mm~2mm程度の粒砂2%位混入 されど粒は細砂で繊密な粒土。	右		7.5YY6/2灰白色 内部は灰とかぶりN 6/0灰白色
63	杯盤	18.0	3.8	底部回転式切り後つまみを付ける。 成形は粗。	5mm~4mm程度の粒砂1%位混入 したやや粗な粒土。	中や軟	左	T6YY8/1灰白色 繊密な粒土で底面 は灰白色で色がくっ なっている。
64	杯盤	14.0	2.7	底部回転式切り後つまみを付ける。 成形は粗。	細砂で粗糲な粒土。	良好	右	7.5YY8/1灰白色

土器番号	基種	法量(m)	形態・手法等の特徴	胎土構成	クロ画別	色調	
		口径 高さ					
65	杯盤	13.6	2.1	内輪み切り底つまりを付けた。粗面な底形だが技術的には上手。	5mm位の粒砂と2.0mm位受けられた細砂で繊維な胎土。	左	8 YR 7/3灰白色
66	杯盤	17.8	2.5	内輪み切り底つまりを付けた。粗面な底形だが技術的には上手。	3mm位の粒砂が散見されるが粗面で繊維な胎土。	左	8 YT 7/3灰白色
67	高杯	(底部13.8)	底は棒状の上手であり上手である。他の工芸は底のさくがうかる。底の工芸は底は底に上げられ、底部内面は繊維がかけられてなめらかな出来。	3mm程度の粒砂0.5mm位混入されているが非常に繊密な胎土。	左	黄褐色N 5/9灰褐色 底部7.5/8/1白色 底部部分は本体の色3 YR 8/1灰白色	
68	高杯	26.4	12.6	脚部はねじ上げて細くし、底に内部を開拓している。底面部と脚部を接合する。成形は丁寧。	2mm程度の粗砂2%程度混入されど繊維な胎土。	左	2.5 YR 8/2灰白色
69	壺	15.2	8.3	成形は良好。	2mm程度の粒砂10%位含むれど繊維な胎土。	左	2.5 YR 6/1黄灰色
70	壺	5.8	3.4	成形は粗雑。	1mm未溝の粗砂20%位混入されているが繊密な胎土。	左	7.5 YR 7/2灰オーライグ
71	壺	11.0	3.4	成形は良好。	0.5mm~2mmの粒砂4~6%位、他に細砂の混入多く少々粗な胎土。	右	7.5 YR 7/2灰白色 内輪底部分からって8 YR 3/1灰褐色
72	壺	12.6	6.1	脚部と肩の積りでつないでいる。 成形は剛。大きさの割に火が弱過ぎる。	2mm程度の粗砂少々見受けられるが繊密な胎土。	左	表面灰化色しているが削れ目より見て内部繊維をおおっている
73	壺	12.4	8.7	底部は後でめ込んであるが、異なる胎土を使用している。成形は剛。	粗砂で繊維な胎土。	右	2.5 G YR 8/1オーライグ
74	壺	21.8	7.8	底部切端断面不規。高台を付ける。 成形は剛。	2mm~5mmの粒砂3%程度混入されても割りと繊維な胎土。	左	7.5 YR 7/2灰白色
75	瓶	23.0	13.0	内輪削面で調節。成形は良好。	表面に細砂で繊維な胎土。	右	7.5 YR 8/1灰白色を白っぽくした色
76	円筒器	11.6	7.7	先づ脚部を造り、海と陸に相当する部分で内輪半切りし、縫を付けて火に調整したか。 又は円板上に脚部を造り、縫を付けてか。 海陸的の脚部で削されて製作方法が判断できない。 円筒器とすれば少々粗雑な造り。	1mm程度の粗砂15%位混入されど繊維な胎土。	左	2.5 G YR 8/1オーライグ
77	円筒器	12.4	8.8	先づ脚部を造り、海と陸に相当する部分で内輪半切りし、縫を付けて火に調整したか。 又は円板上に脚部を造り、縫を付けてか。 海陸的の脚部で削されて製作方法が判断できない。 円筒器とすれば少々粗雑な造り。	1mm程度の粗砂15%位混入されど繊維な胎土。	左	N 8/0灰白色
78	高台付杯	19.0	4.8	内輪み切り発達度をつける。 成形は良好。内輪成形後擦で調節。口縁丸く外側にふくねて他に丁寧を見ない。	1mm~2mm前後の粒砂10%近く混入されていて、割りと繊維な胎土。	左	2.5 YR 8/2灰白色
79	壺	12.4	4.7	底部内輪み切り。 成形は作品が厚手で柔軟な感じ。	粗砂で繊維な胎土。	左	2.5 YR 6/8褐色
80	皿	12.8	1.8	底部内輪み切り。 成形は作品が厚手で柔軟な感じ。	粗砂で繊維な胎土。	左	2.5 YR 6/8褐色
81	杯盤	12.8	3.3	内輪み切り。成形はやや粗鈍。	1mm程度の粗砂15%位混入された少々粗な胎土。	左	7.5 YR 5/1灰褐色
82	瓶	19.0	4.8	成形後調節等を利用したのか、口の上で腰で調節が施されている「穿孔」作品。	粗砂で繊維な胎土。	左	2.5 G YR 7/1明オーライグ

この土器類は花原窯跡及びその周辺から出土したものである。

土器番号1から17までは第3号窯内より出土した上器で純粹な3号窯製品である。土器番号18から29までは第27号窯底部出土の土器で、ほぼ純粹な27号窯製品と思われる。土器番号30から36までは第10号窯内より出土の土器だが、少なくとも4基以上の窯で形成されていると思われる所以、いづれ製の土器か判らない。土器番号37から78までは10号窯脇灰原出土土器で、灰原は7種類に分類できた。土器番号78は3号窯と27号窯中間で採取。土器番号79・80は3号窯脇の窯より採取。土器番号81・82は10号窯脇土壤状遺構より採取。

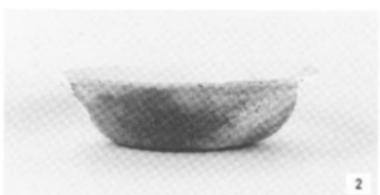
第五章 土器および遺構写真



1



6



2



7



3



8



4



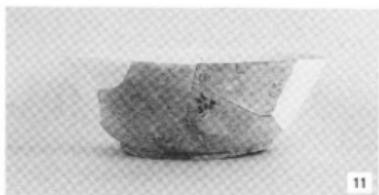
9



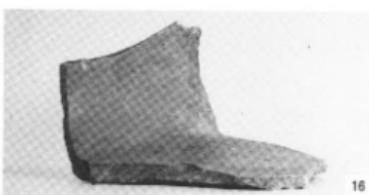
5



10



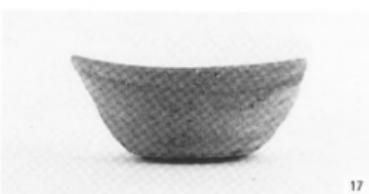
11



16



12



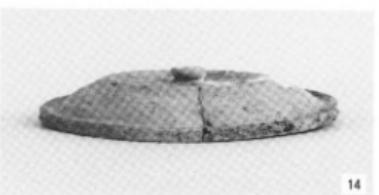
17



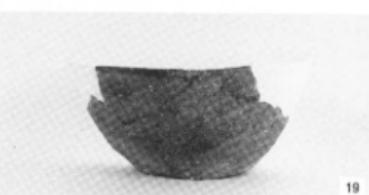
13



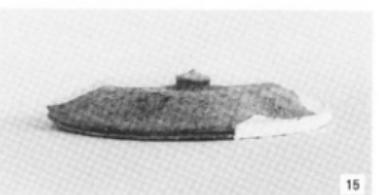
18



14



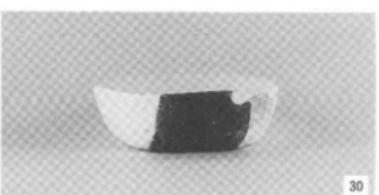
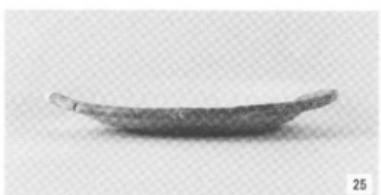
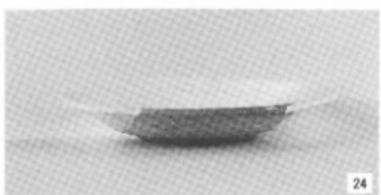
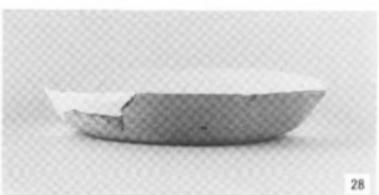
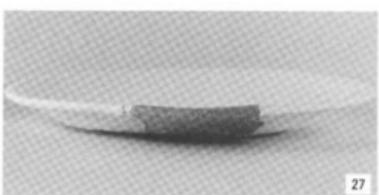
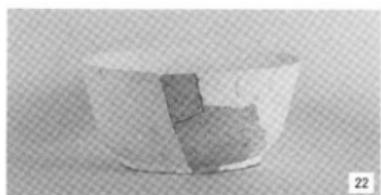
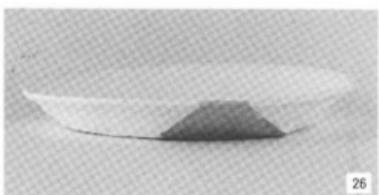
19



15

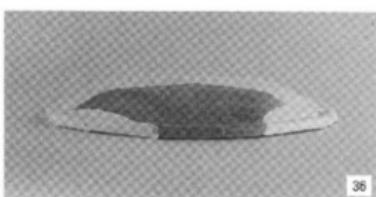


20

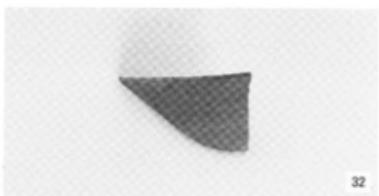




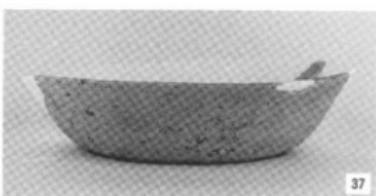
31



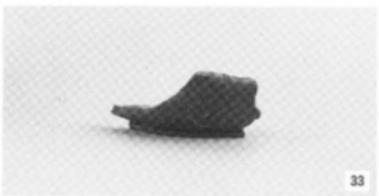
36



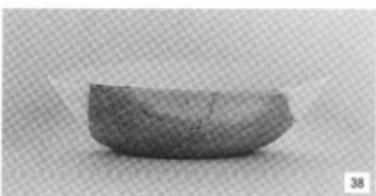
32



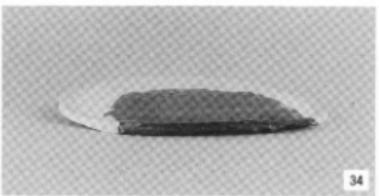
37



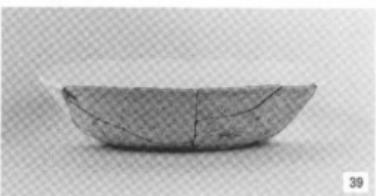
33



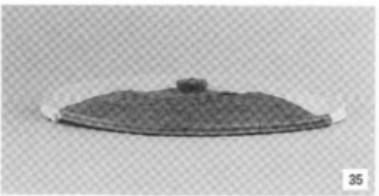
38



34



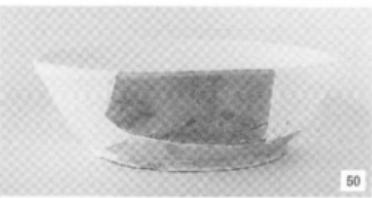
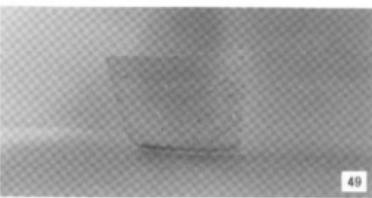
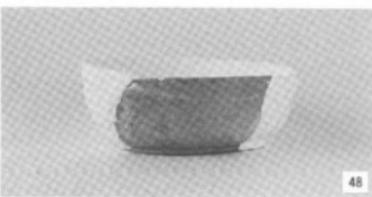
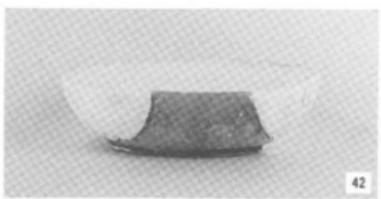
39

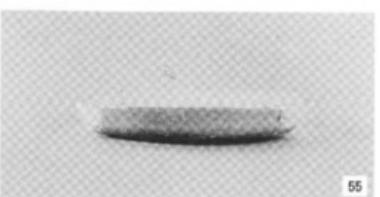
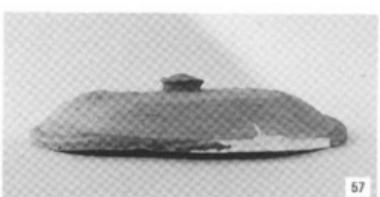
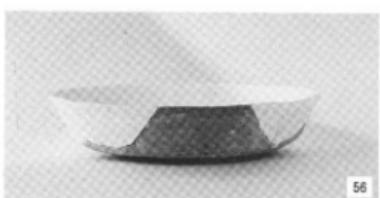


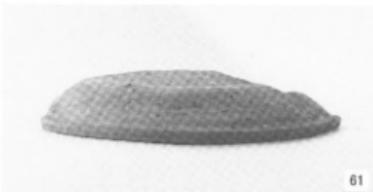
35



40







61



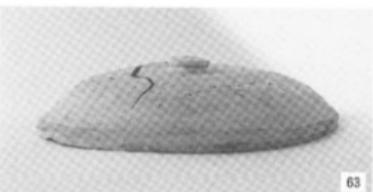
66



62



67



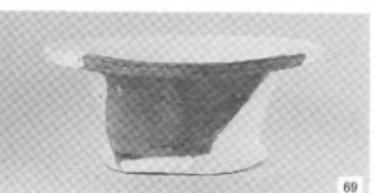
63



68



64



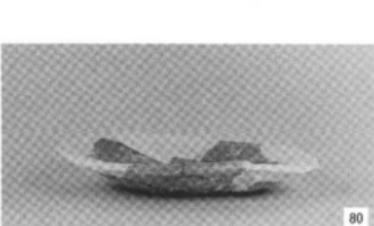
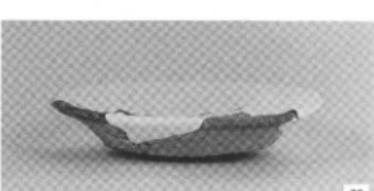
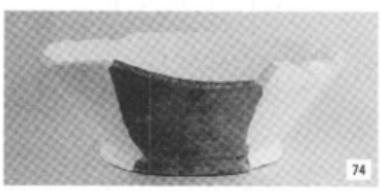
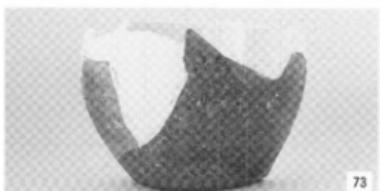
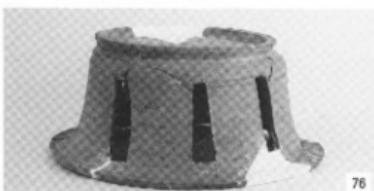
69

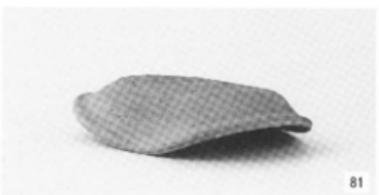


65

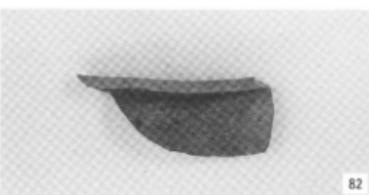


70





81



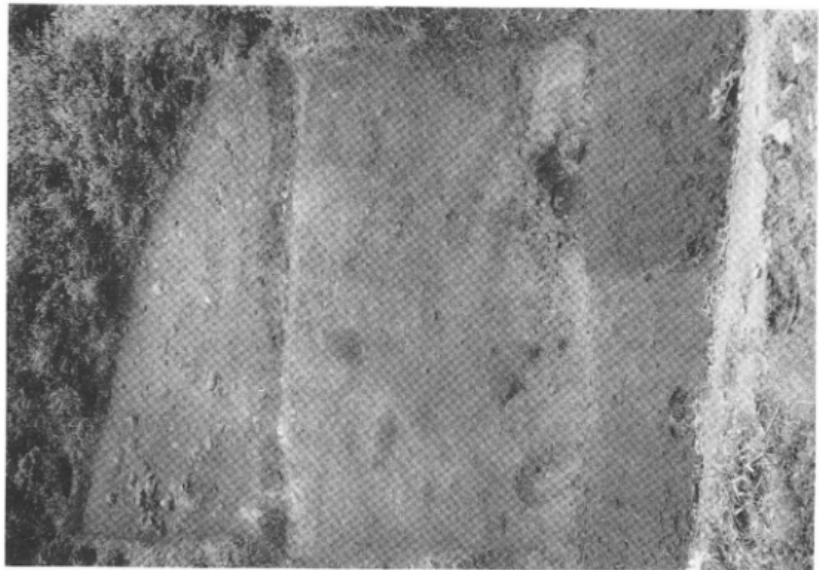
82



〔2〕土壌状遺跡



〔3〕土壌状遺跡発掘後



〔1〕土壌状遺跡発掘前全景



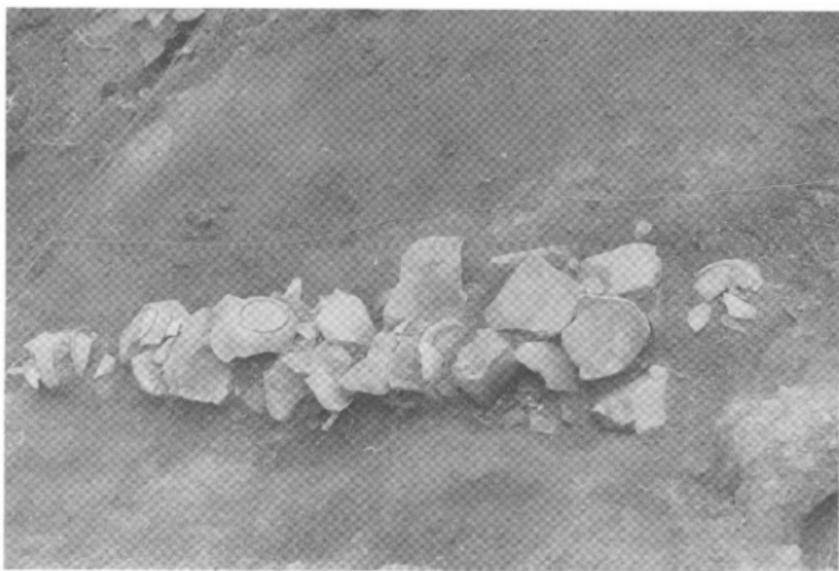
〔1〕 3号窯・27号窯全景



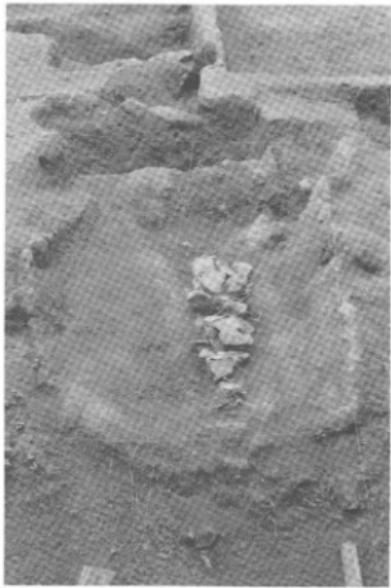
〔2〕 3号窯上層部検出状況



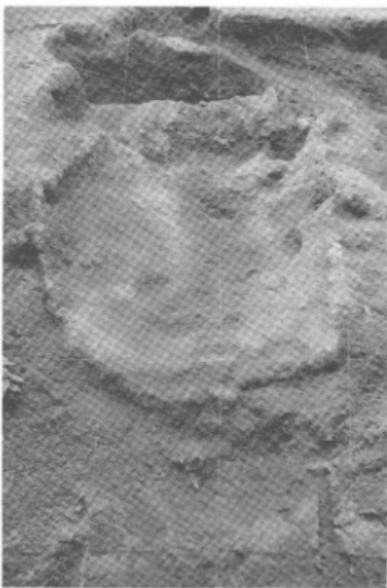
〔3〕 3号窯中層部検出状況



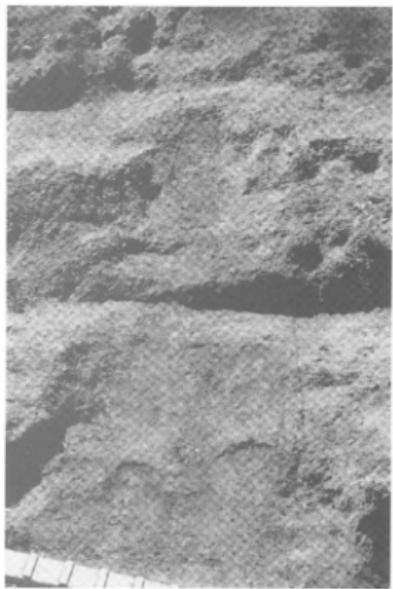
〔1〕 3号窯下層部土器群



〔2〕 3号窯下層部検出状況



〔3〕 3号窯窯体部



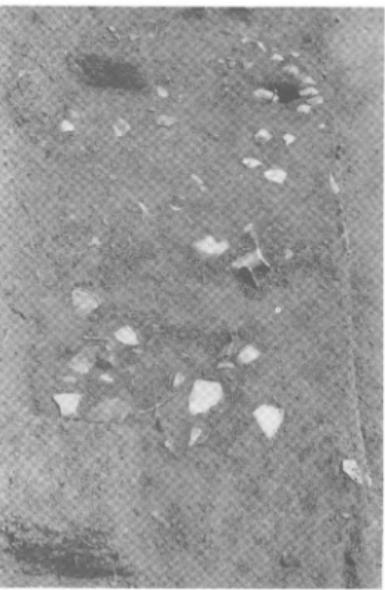
〔1〕 27号窯発掘前



〔2〕 27号窯発掘状況(1)



〔3〕 27号窯発掘状況(2)



〔4〕 27号窯発掘状況(3)



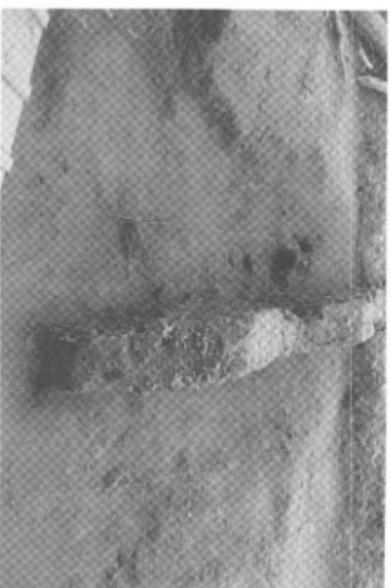
〔3〕 27号窯発掘後(2)



〔4〕 27号窯発掘後(3)



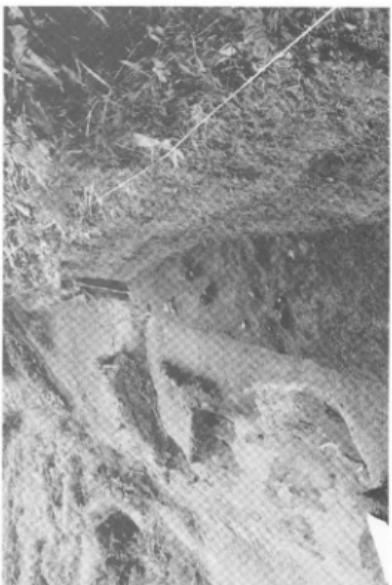
〔1〕 27号窯発掘状況(4)



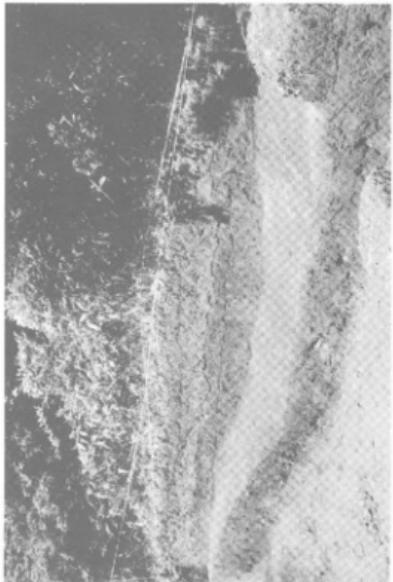
〔2〕 27号窯発掘後(1)



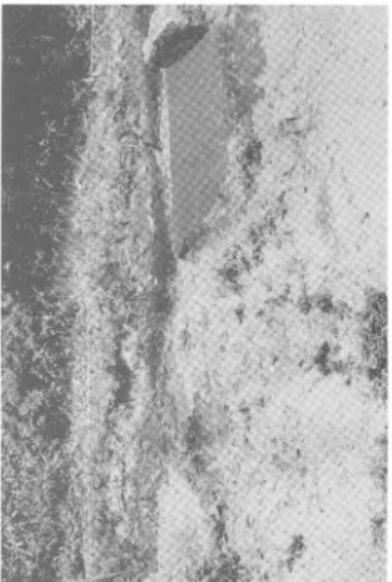
〔3〕灰原発掘状況(1)



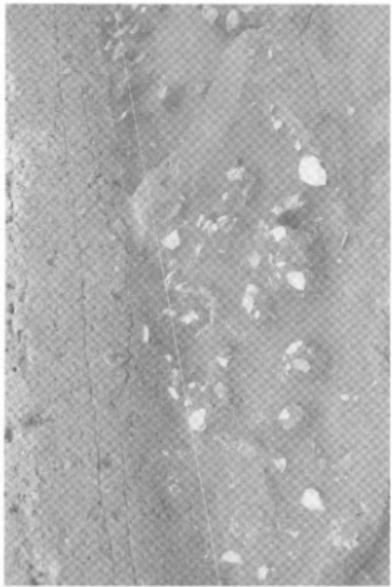
〔4〕灰原発掘状況(2)



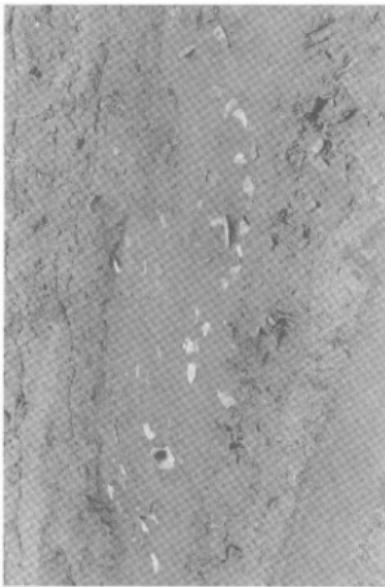
〔1〕10号窯・灰原発掘前(1)



〔2〕10号窯・灰原発掘前(2)



(3) 灰原発掘状況(5)



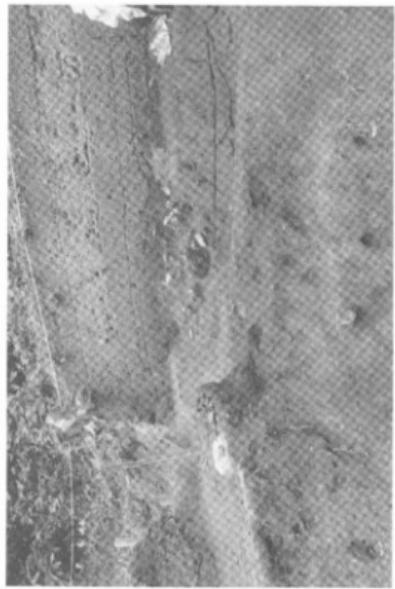
(4) 灰原発掘状況(6)



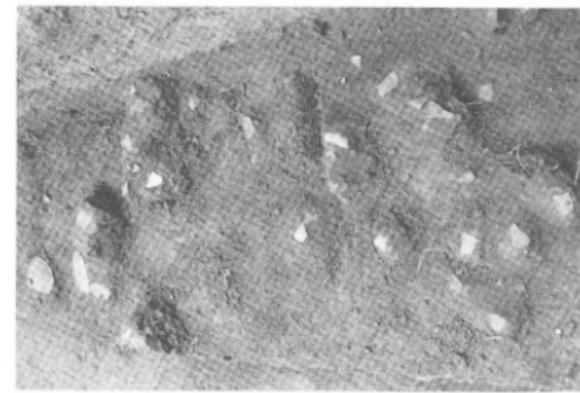
(1) 灰原発掘状況(3)



(2) 灰原発掘状況(4)



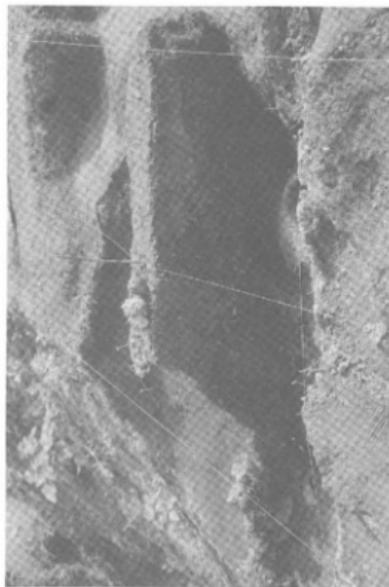
(3) 10号煤上層部免掘状況



(1) (2)

灰原発掘状況 (7 * 8)

(4) 10号煤発掘状況



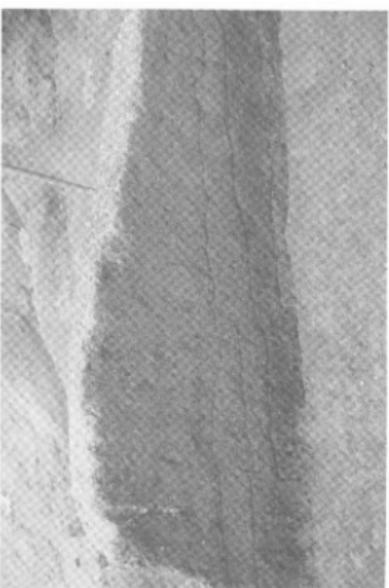
〔 3 〕 10号燃點灰原ベルト(3)



〔 4 〕 10号燃點灰原ベルト(4)



〔 1 〕 10号燃點灰原ベルト(1)



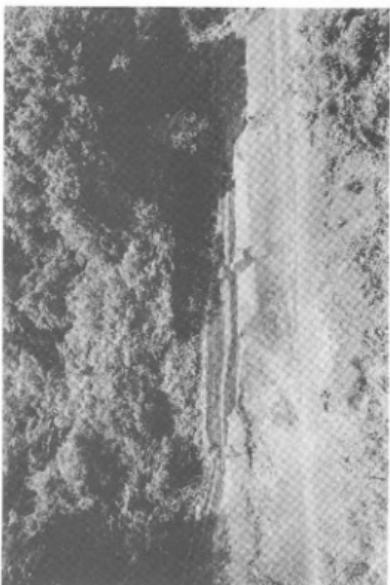
〔 2 〕 10号燃點灰原ベルト(2)



〔3〕3号窯・27号窯発掘作業風景(1)



〔4〕3号窯・27号窯発掘作業風景(2)



〔1〕10号窯・灰原発掘状況



〔2〕10号窯・灰原発掘後

第六章 むすび

今回の窯跡報告書に窯跡の熱残留磁気測定の結果が間に合わず報告できなかったことを残念に思う。自然科学で割り出した年代は対象物によって±50年とか±20年という誤差を考慮しなければならないが、精度は高い。考古学的土器の製造され使用されていた時代の年代推定は扱う人の経験と知識によって異ってくる。扱う土器に依って物差しとして使用する編年表を選定し、地域差を考慮しながら年代の推測をするからである。

筆者は鳥取県東部の遺物、遺構だけにしか接していないので、範囲の狭い考え方しかできないが、この地方の7世紀末以降の須恵器の年代推定の尺度として本当に安心して利用できる編年表は皆無に等しいと思っている。7世紀でもまだ古墳期といわれる時代ものは、鳥取県西部の古墳出土の須恵器を基準に考案された編年表や大阪府の須恵器編年を利用しているが、実際に手に取って利用すると異質の参考書を手にしたような気がする。それでも7世紀末以降のものは須恵器編年や国府町の国庁出土土器編年にたよらざるを得ない。

鳥取県東部には6世紀代の窯と見られるものをはじめ数多くの窯跡の存在が報告されている。その中でもこの花原を含む私都古窯群は、数に於ても密度に於ても最高で、鳥取県東部においては、これ程多数のものが高密度に存在する窯跡群の発見はまだなされていない。私都古窯群は鳥取県東部一円を消費地とする7世紀以降の須恵器供給の一大生産地であったと思う。

土器の形態や大きさは、時代時代の消費者の使い勝手の良さなど消費者の要求によって変化するものであろうし、特に文化傳播の速度が早まったと思われる奈良・平安期以降において全国いづれの窯で焼かれた土器であろうと、時代の要求する土器の形態や大きさは、その時代時代によって全国的な均一化が見られるようになったのであろう。だから大阪府の須恵器編年も鳥取県東部で充分参考に供することができるのだと思う。しかし越前焼、備前焼、九谷焼それぞれ見分けがつくように、製品は地域によって特徴がある。越前焼と備前焼にちがいがあるように須恵器には須恵器の、私都古窯群製品には私都古窯群の特徴があり、須恵器編年で私都古窯群製品の製造年代を推測するには少なからず無理がある。実際に私都古窯群の消費地とみられている所から出土した多量の須恵器の編年がなされたものがあり、それを見ると考古学的考察の外に須恵器編年の影響が多分に感じられる。今回を含めて私都古窯群には科学のメスが三度入った。まだまだ開発は進むものと思われる。窯跡の調査も多くなるであろう。製造地より科学的手をかりた精度の高い編年表が発送されるのも、あまり遠い将来ではなかろうと期待している。

郡家町文化財報告書14

花原塗跡群発掘調査報告書

(県道大坪・準停車場線建設に伴う)

発行 1992・3

発行者 郡家町教育委員会

鳥取県八頭郡郡家町郡家493番地

TEL (0858) 72-0201 (代表)

印刷 日ノ丸印刷株式会社
